

本章では、劉向の五行説について考察する。

劉向、字は子政、原名を更生といい、昭帝期に生まれた。幼少の頃より『枕中鴻宝苑秘書』に親しみ(1)、仕官の後にその才能を宣帝に評価されて『春秋穀梁伝』を授かり、石渠閣会議に参加して五經の異同を論じた。元帝期には蕭望之・周堪と共に宦官の弘恭・石顕の専横に対抗するものの、政争に敗れて免官され、庶人に落とされた。成帝期に石顕等が誅されると、劉向は再び取り立てられ、光祿大夫に任じられた。劉向は成帝に重用されて活躍し、この時期に諸書の校讎を任され、礼制を論じ、また外戚の王氏の専横を抑制するために様々な上奏を行った。『漢書』に「年七十二卒。卒後十三歳、而王氏代漢」とあることから、成帝崩御の前後に卒したと考えられる(2)。

劉向の業績は非常に多い。『列女伝』『新序』『説苑』といった著作はもとより、とりわけ後世へ巨大な影響を残したとされるのが校書事業であり、これによって多くの文献のテキストが定まった(3)。本研究では、それらについては措いておいて、専ら劉向の説いた五行説、『洪範五行伝論』と五徳終始説を扱う。これらの理論・構造を分析することで、劉向の五行説の特徴を明らかにする。